

FD セミナー報告書（東京会場） 1 日目

2025 年 11 月 14 日

作成：田中 良

1. 開催概要

2025 年 11 月 13 日、全国専門学校教育研究会主催の FD 関連紹介セミナー「専修学校における学校評価ガイドラインの改訂について」（1 日目）が開催されました。

本セミナーは文部科学省委託事業の一環として行われました。

2. 開会挨拶と研修の目的

主催者である全国専門学校教育研究会 泉田委員長より開会挨拶があり、研修のテーマが「専修学校における学校評価ガイドラインの改定」であることが共有されました。

研修の目的は、1 日目の「自己点検評価」と 2 日目の「学校関係者評価」を中心に学ぶこと、そして他の学校の教員との情報交換を通じて仲間を増やすことの重要性が伝えられました。

3. 文部科学省からの説明（専修学校をめぐる動向と法改正）

文部科学省専修学校振興室：室長補佐の塩屋仁史様より、専修学校をめぐる最近の動向と、改正学校教育法の施行（2026 年 4 月 1 日）に伴う対応について説明がありました。

<主な改正点は以下の通り>

- ・ 高等教育機関としての位置付けの明確化
- ・ 専門課程の単位制への統一
- ・ 専攻科の設置
- ・ 専門士の法律事項化
- ・ 大学と同等の項目による自己点検・評価の義務付け、および第三者評価の努力義務化
- ・ 特に、第三者評価については、令和 8 年 4 月 1 日から 5 年以内に実施することが義務付けられる認定要件があることが示されました。

4. 自己点検評価運用ガイドラインに関する研修

JAMOTE 認証サービス株式会社の八木先生より、教育・職業教育・キャリア教育財団が策定した「自己点検評価評価表及び運用ガイドライン 2024 年改訂版」の考え方と活用方法についての研修が行われました。

評価表は「教育の質の向上」「経営、財務、ガバナンス」など 5 つの領域で構成され、評価項目は「評価基準」「評価の視点」「エビデンス」の 3 要素から成る。自己点検評価は、この評価表を基に PDCA サイクル（計画・実行・評価・改善）で進めることが示され、ガイドラインの活用は学校の質の向上、法令等への質の保証、そして対外的な説明責任の遂行に繋がると述べられました。

自己評価は、定性的な記述に加え、定量的な評価（3, 2, 1）とその根拠となるエビデンスが求められ、エビデンスは最も効果的で分かりやすいものを 2～3 点に絞って提示することが推奨されました。

5. 自己点検評価グループワークと総括

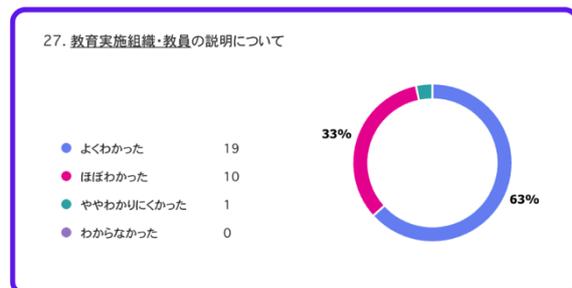
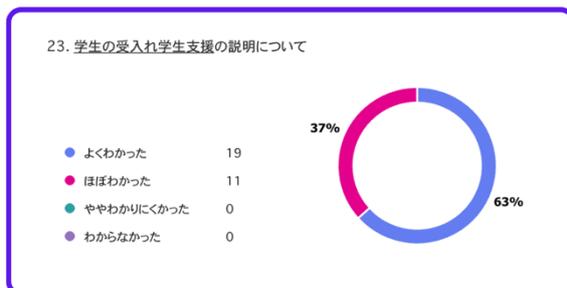
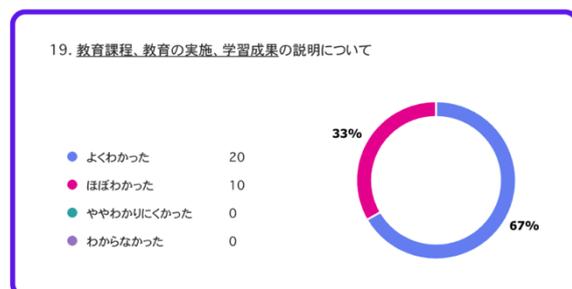
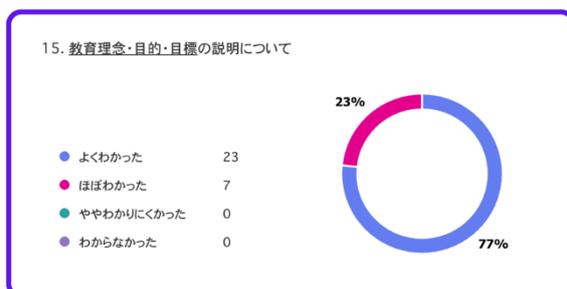
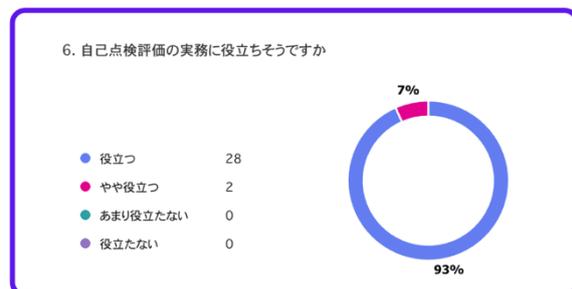
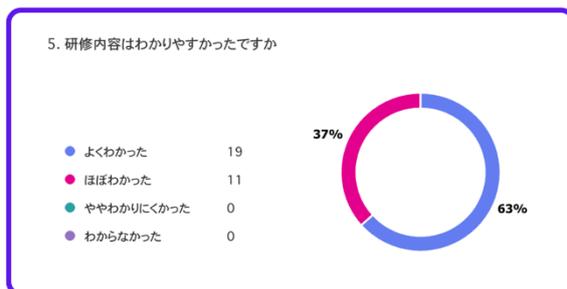
講演後には、評価表を用いたグループワークが実施されました。参加者からは、「エビデンス（証拠）の明確化」「学校独自の特性の評価」「教育成果の計測」「FD（教員研修）」の役割など、自己点検の難しさと重要性について活発な意見交換が行われました。

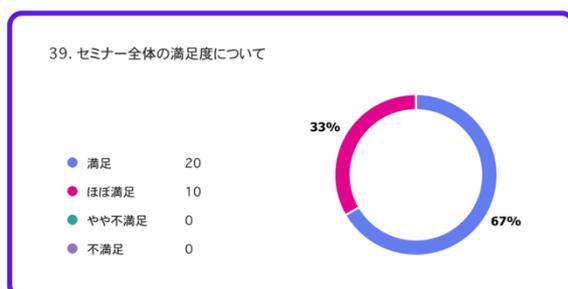
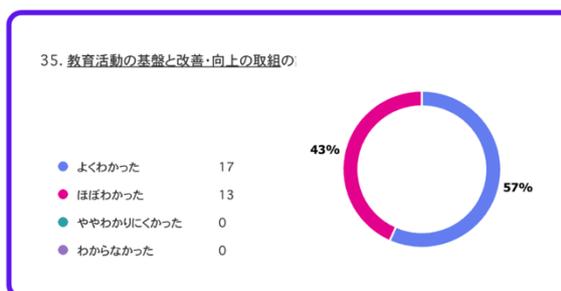
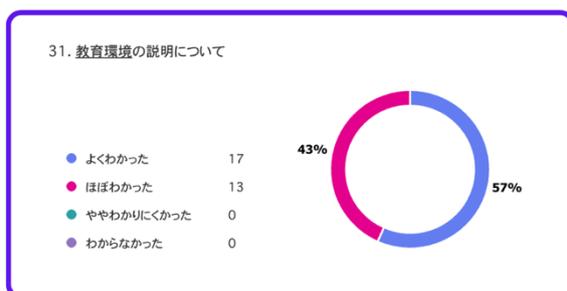
この討議は、他校との情報交換を通じて、自校の視点の偏りを修正する貴重な機会となりました。

総括として八木先生から、「ガイドラインは自己満足のためのものではなく、継続的な質向上のためのツールとして活用することの重要性」が改めて伝えられました。

6. アンケート結果

- ・アンケート回収率 100%（参加者 30 名、回答 30 名、未回答 0 名）
- ・アンケート項目は全 42 項目
- ・主な回答は以下の通り





7. セミナー全体に関する受講者の感想（アンケート自由記述より）

参加者からは、自己点検評価の具体的な進め方や、それを支える体制づくりについて、多くの学びが得られたという声が寄せられました。

特に、各校の事例紹介が非常に分かりやすく、自校の運営状況と照らし合わせながら改善点を考えるきっかけになったという意見が多く見られました。

チーム編成の方法、内部質保証の考え方、また学生支援を含めた全体的な組織づくりなど、日常業務の中で判断に迷うポイントに明確な方向性を与えてくれたとの評価が大変多く挙がっています。

また、エビデンスの整理方法や、書類不足をどのように補っていくかといった実務に直結する内容について、現場感のある解説が特に参考になったとの声も目立ちました。

グループワークを通じて他校の取り組みを直接聞いたことで、自分たちだけで悩み続けていた課題に対して新しい視点が得られたという前向きな感想も多く、研修を通じた横のつながりの重要性を再認識したという意見も散見されました。

進行については「メリハリがあり分かりやすかった」「タイマー等の配慮で集中しやすかった」という肯定的な意見が多かった一方、最後の質疑応答に十分な時間が確保できなかった点については、「もっと質問できる時間が欲しかった」という要望が複数見られました。

また、東海圏での開催を希望する声や、より深く突っ込んだ実例を扱う機会を求める声もありました。

総じて、1日目の研修は「実務にすぐ役立つ」「これまで曖昧だった点が整理された」「明日の参加も楽しみ」という意見が多く、受講者満足度は高く、実りのある内容であったことがうかがえました。

8. セミナーの様子



以上

※ 回答の詳細は下記のリンクから確認することができます。

<https://tinyurl.com/9e2jfudy>

FD セミナー報告書（東京会場） 2 日目

2025 年 11 月 14 日

作成：田中 良

1. 開催概要

2025 年 11 月 14 日、全国専門学校教育研究会主催の FD 関連紹介セミナー「専修学校における学校評価ガイドラインの改訂について」（2 日目）が開催されました。

本セミナーは文部科学省委託事業の一環として行われました。

2. 講演内容：学校関係者評価委員会の運用ガイドライン

2 日目は、JAMOTE 認証サービス株式会社の八木先生より「学校関係者評価委員会運用ガイドライン」に関する講演が行われました。

焦点は、評価者の選任と委員会の設置、開催運営、評価結果の取りまとめと公表についてです。

特に「委員長の人選」が重要であり、委員長は学校の関係者ではない利害関係者（外部委員）が互選で選出することが基本であることが伝えられました。

学校長や学校関係者が委員長を務めるのはガイドライン上不適切であり、商工会会長や高校・大学の教員、業界関係者など、外部の適任者に依頼し、委員会の独立性を保つスタイルが推奨されました。

また、第三者評価については、5 年のサイクルの中で、文科省は予算の有効活用のため、1 年目、2 年目に受審する学校に補助金をより手厚くする方向性を検討していることが示されました。

3. グループワークと評価結果の取りまとめ

グループワークでは、委員の選定（特に高校関係者のコネクション獲得）、委員へのエビデンス送付に伴う事前準備の事務量の多さ、そして運営方法の工夫（AI を使った資料のたたき台作成、運営側が進行原稿を渡すなど）が議論されました。

また、評価意見の質を確保するため、職業実践や資格分野に精通した委員を選任することの重要性も指摘されました。

評価結果の取りまとめにおいては、多数決を極力避け、具体的な改善策や対応策について委員全員の意見を踏まえた合意形成を図ることが重要であると述べられました。

「合意形成とは、学校側が実行可能な改善策を提示し、委員の意見をうまくまとめていくプロセスであり、その議論の結果を次回会議までのアクションプランとして設定することが求められる」とのご説明がありました。

最後に、参加者から、第三者からの比較を可能にするため、文部科学省（本セミナー委員会）に対し、報告フォーマットの統一とひな形（案）の提示を要望する意見が出され、委員会へ報告されることが確認されました。

4. アンケート結果

- ・アンケート回収率 90%（参加者 30 名、回答 27 名、未回答 0 名）
- ・アンケート項目は全 25 項目
- ・主な回答は以下の通り

※二日目は時間の都合で会場での回答に限らず、別途ご回答いただくこととしたため、未回答（3 名）が発生いたしました。



5. セミナー全体に関する受講者の感想（アンケート自由記述より）

2 日目は、他校の具体的な評価委員会運営や自己点検の事例が共有されたことで、参加者から「非常に実務に応用しやすい内容だった」という声が多く寄せられました。

特に、委員会の構成、委員の意見の扱い方、委員会が形骸化しないための工夫、校内自己評価の対象者の選定方法など、日頃悩みやすいテーマへの具体的な説明が評価されています。

また、評価結果のまとめ方や公表に至るプロセスについても、現場でどのように作業を進めれば

よいか理解できたという感想が多く、情報の整理と伝達に関する実践的なヒントが得られたとの声が多数寄せられました。

エビデンス整備に関しても、必要な書類の種類や、チェック時にどの部分が見落とされやすいかといった事例が紹介されたことで、「自校の不足部分が明確になった」という意見が多く見られました。

他校の取り組みを比較することで、自分たちの強みと課題の双方に気づくことができ、内部質保証のサイクルをどのように向上させていくべきかの方向性を再確認できたという声もありました。また、「他校の取り組みを詳しく知ることができたのが最大の収穫」「自校だけでは気づけない視点を得られた」という感想も多数寄せられており、他校事例の共有による学びの大きさがうかがえます。

一方で、説明内容の一部については「さらに深い具体例があるとより理解が深まる」「委員会運営の良い事例と悪い事例を比較してほしい」といった要望もあり、今後の開催時の内容拡充に対する期待が見られました。

ただし全体としては、「説明が丁寧でわかりやすかった」「運営がスムーズで集中して受講できた」「今日聞いた内容をすぐに持ち帰って活用したい」といった満足度の高い意見が大半を占めておりました。

7. セミナーの様子



※ アンケート回答の詳細は下記のリンクから確認することができます。

<https://tinyurl.com/bdzy2r2b>

<二日間の総まとめ>

二日間を通じて、参加の皆様からは「自校の内部質保証体制を見直すうえで必要な視点を幅広く得られた」ことがうかがえました。

他校事例や具体的な実務プロセスに触れたことで、自校の現状を客観的に捉え、改善の方向性を明確にできたとの声が多く寄せられています。

また、委員会運営からエビデンス整備に至るまで、一連の流れを体系的に理解できた点が、本研修の大きな成果となりました。

全体として、実務へ直結する学びが豊富で、明日からの取り組みに前向きな意欲を持てる研修となったものと総括いたします。

以上